

◇ 10月の天文暦 ◇

日	時	記	事
3	3	土星	留
7	17	朔	
8	14	寒露	(太陽黄経 195°)
9	1	火星	月の 5°N 通過
11	12	月	最遠
12	8	天王星	合
14	6	木星	月の 2°N 通過
15	22	上弦	
22	22	望	
23	17	霜降	(太陽黄経 210°)
	21	月	最近
29	14	下弦	

言いたい放題・言いたい放題・言いたい放題

情報公害

「Ap. J. (Astrophysical Journal) の発行部数はいくらか」という質問を、まわりの研究者連に手あたりしだいにしてみると、ほとんどの人は、1万部とか10万部とか答える。実は4,000部ぐらいらしい。われわれ天体物理を研究する者にとっては、万難を排しても目を通さずにはおられないこの雑誌のことだから、数万部ぐらいは出ていると思うのは「常識的」な答えであろう。

「常識的」な答えをした人に、正解を教えると、もう一度いろいろ推算をしながら、やはり信じられない顔つきをしている。日本人インテリの性癖の一つに蔵書好きがあるというが、シカゴ大学出版にとって、われわれ日本の天体物理屋は結構なお得意様であるらしい。

しかし、この Ap. J. も、最近の大学院生で個人購入をしている人は少ないようである。年間1万円余りの出費は負担が大きいし、図書室からのコピーでまず間にあるからさうだ。筆者は、10年間近く、せせと定期購入をつづけているが、院生諸君とはちょっと別の意味で、

近頃この購入に疑問が生れてきた。

まず、半月に1号、週刊誌に近い調子で300~400ページの雑誌がどんどん送られてくる。アブストラクトをさっと見て、こればと思う論文の著者やタイトルをカードに記入して、カードボックスに整理しておく。なんのことはない図書室で十分に足りる作業である。

つぎに、以前は個人用は自宅において家で見るために便利であったが、最近は何ものすごい勢で増殖し、ついに家人の生活を圧迫しだしたので、やむを得ず大学に運びこんだ。おかげで同室者はときどき重宝しているらしい。順序を無茶苦茶にならべてあったのを整理するように請求されて、暑い中を汗水流してきちんとした。

これは、筆者の Ap. J. との「闘い」の現状であるが、実際近ごろの天文関係の文献の増加ぶりは、驚きを通りこしておそろしいぐらいである。雑誌の種類は増える、そのボリュームは増える。単行本の出版数は膨大である。

日本人の蔵書好きも、こうなるともはや追いつかなくなる。個人の問題でとどまるところか公共機関にも影響があらわれてきた。ある大学の小さな天文研究室では、図書費のためにいまや倒産しそうだと聞いた。筆者の教室では、図書関係費は教室の実質研究費(電気代・ガス代・水道代をはじめ教室の維持費を講座費から差引いた残り)の大半を占めつつある。

それにしても、これらの大量の文献の中で、「読みごたえ」のあるものがひどく少なくなってきたように思われる。かといって、全々無意味なものはたしかにないからいやでも少なくとも研究機関にはとり揃えておかねばならない。集中的な情報の収集とサービスをする機関の設置は、打開策の一つにはなるが、研究者の立場からすれば、他人に「読みごたえ」のない論文や書物を書かずに済ませられることが望むところである。情報公害の最大の悪は、研究者が自然とじっくり対話できないようにさせてゆくことであろう。

(京都大学理学部宇宙物理学教室 大谷 浩)

